川上宏奨学基金報告書

仕事としての新聞記者

今回、川上宏奨学基金をいただいて、「仕事としての新聞記者」を書きあげることができた。論文の内容と、調査について報告する。

１．卒業論文の要旨

本論文では、新聞記者は公平中立であるという「客観的ジャーナリズム」に則した立場と、読者や取材対象に寄り添った「ケアのジャーナリズム」に則した立場を無意識に使い分けて、仕事にとりくんでいるのではないかという問いを立てた。そして、新聞記者がどのような考えに沿って働いているかを調査、分析した。

第１章では、記者たちが新聞記事のもととなる情報を得るときに、何を考えているのかを分析した。記者は情報をとるとき、相手に気に入ってもらうこと、私的な関係を作ること、既存の関係を使うこと、取材対象とギブ＆テイクの関係を作ることの４つの方法を使っている。第２章では、身近にいる他社の記者との人間関係を探った。記者は他社の記者と仲良くする。仕事がはかどるからという理由からだ。ただ、大事な情報は交換しない。それが記者流の「礼儀」であると認識している。第３章では、「忙しい」仕事との付き合い方を探った。諦め、納得、楽しむという３つの感情で向き合っている。第４章では、仕事の評価について分析する。客観的な数字やコメント、社内評価、自分で決めた評価で自己評価をしている。基準は内容によって変わる。第５章では、記者たちがどのような記事を良い記事と考えているかを探った。感覚が伝わる、新しさ、批判、読者のためになるかの、４つの基準に当てはまるものを良いとしている。また、内容によってその基準は変わる。第６章では、今後の新聞を、どのようにしていけばいいと考えているのかを分析した。読者の意見を汲むことが必要だと考えているようだ。

結論は、新聞記者は「客観的ジャーナリズム」と「ケアのジャーナリズム」の両方の立場を持っている。それを状況に合わせて、使い分け、融合させ、離脱しながら仕事をしている。行動に矛盾が生じることもあるが、無意識に使い分けているために、あまり疑問を抱いたりしない。両方の立場を使い分けて情報を集め、状況に合わせてどちらかの立場に立った記事を書くことが、新聞記者が考える自分たちの仕事なのである。

２．奨学金の主な用途

本論文では、新聞社、通信社に勤めている記者にインタビュー調査を行った。実際に新聞に載った原稿をみせてもらいながら、どのように取材をすすめたのか、情報はどこから入手したのかなど、取材から執筆までの流れを聞いた。

調査した５人のうち、川上宏奨学金によってインタビューが実現したのは２人。沖縄県と北海道で働く記者である。沖縄県へは６月２６日から２８日の２泊３日、北海道へは７月１７日から２０日の３泊４日で行った。

３．卒業論文を書き終えて

私は、４月から新聞記者として、地方で記者生活を始める。忙しいと周囲から脅され、不安でもあるが、インタビューをさせてもらった記者のかたたちの仕事観を参考に、自分の記者としての指針をみつけていきたい。

本論文を書くにあたって後押ししてくださった、故川上宏先生とご遺族の皆様、指導していただいた森暢平先生、副査を務めていただいた南保輔先生にとても感謝しています。本当にありがとうございました。

（注）

調査対象は５人。会社の規模が分かれ、男女の数が均等になるように選んだ。対象者には、ゼミナールを担当する森暢平准教授の紹介と、金曜日２限に受講していた「時事問題研究」にゲストスピーカーで訪れた記者、インターンシップで知り合った記者と、知人の紹介からという方法で、アポイントメントをとり、インタビューした。調査した３人は関東で勤務する。ほか１人は北海道、もう１人は沖縄で勤務している。本州以外の調査は、川上奨奨学基金の援助を受けて実現した。